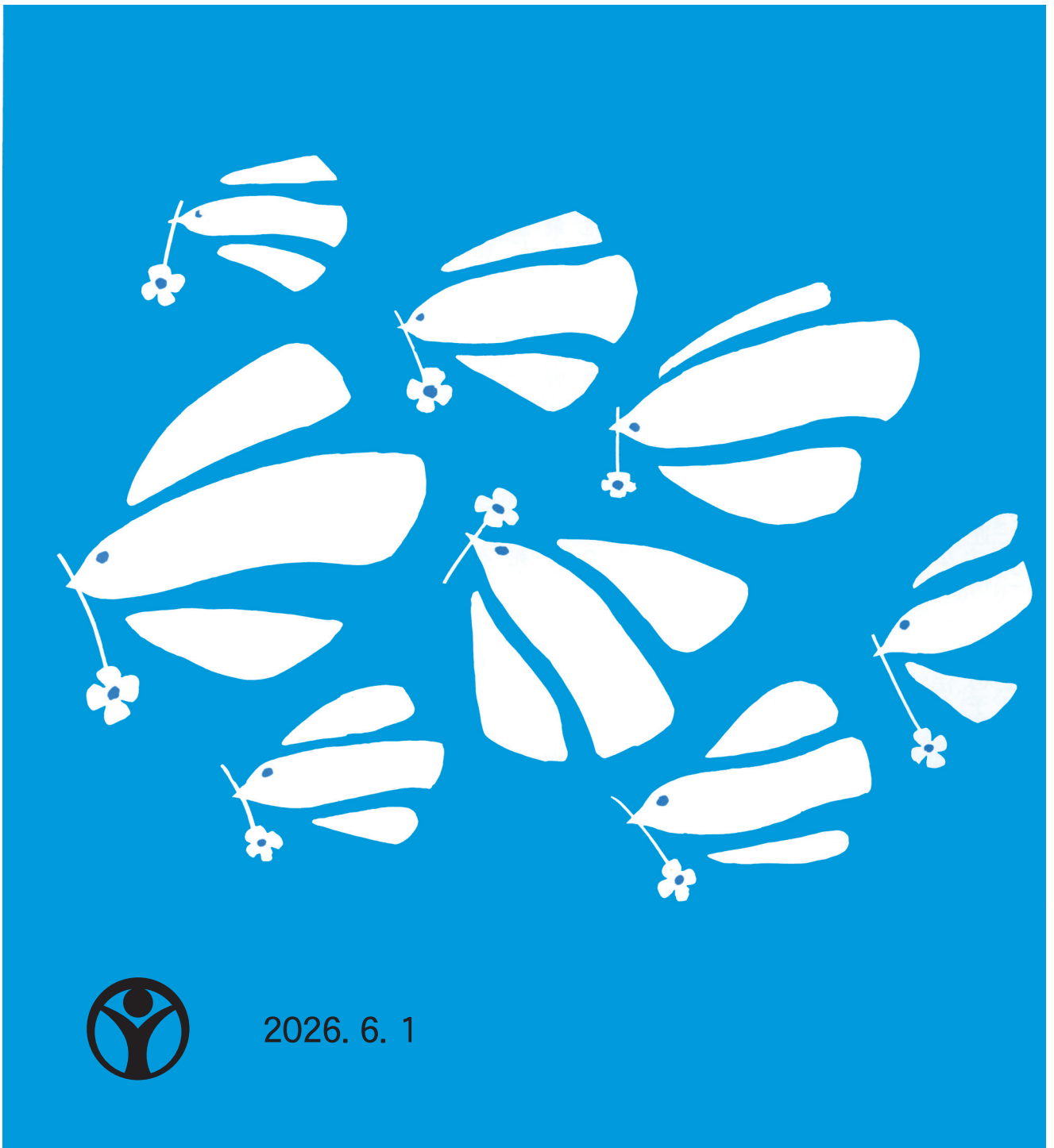


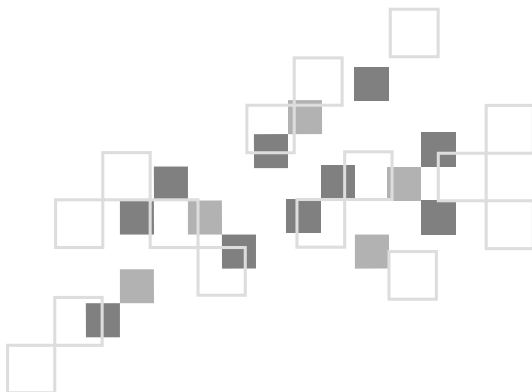
森永の賢い歳時草子園

No.86



機関紙「愛知腎臓財団」第86号（令和8年6月号）

1	巻頭言			
	愛知腎臓財団の役割を改めて考える	3	
		公益財団法人愛知腎臓財団 副会長		
		JCHO中京病院 名誉院長 絹川 常郎		
2	最近の腎炎治療の進歩	4	
		日本赤十字社愛知医療センター		
		名古屋第二病院 腎臓内科部長 齋藤 尚二		
3	移植施設紹介 シリーズ第17回	5	
		小牧市民病院 泌尿器科部長 木村 亨		
4	透析施設紹介			
	医療法人偕行会 偕行会セントラルクリニック	院長 渡邊 出	7
	医療法人生寿会 岡崎北クリニック	院長 佐々木 昌一	9
5	トピックス	11	
6	編集後記	12	



発行所 公益財団法人 愛知腎臓財団
 発行責任者 専務理事 渡井 至彦
 所在地 名古屋市中村区竹橋町36番31号 3階
 TEL 052-446-8085
 FAX 052-446-8368

URL : <https://www.ai-jinzou.or.jp>

e-mail : (事務) jimu@ai-jinzou.or.jp

(コーディネーター) co@ai-jinzou.or.jp

**** **** **** **** **** **** **** **** **** ****

愛知腎臓財団の役割を 改めて考える

公益財団法人愛知腎臓財団 副会長

JCHO中京病院 名誉院長 絹川 常郎



愛知腎臓財団は、1971年に血液透析の整備促進、研究支援、透析の自立支援医療化などを目的に発足した財団法人愛知県腎不全対策協会、ならびに1978年に東海三県一市（愛知県・岐阜県・三重県・名古屋）における献腎移植の普及を目的として設立された任意団体・東海腎臓バンクの事業を発展的に引き継ぎ、1987年に財団法人愛知腎臓財団として発足し、2012年には公益財団法人へ移行しました。その後、腎不全の予防活動としてのCKD対策も重要な柱となるとともに、移植については腎にとどまらず、他臓器の移植推進に対する協力・援助も行うこととなりました。

ここ数年は、透析医療では患者さんの高齢化に伴う代替療法の提示の在り方などが議論される一方、移植に関しては、多臓器移植の発展に必要な多職種にわたる人員確保、ならびに地域・職種間の連携体制の改革が重視されてきました。詳細は、近年の巻頭言をご覧ください。ただればお分かりと思います。

私の場合、専門性の関係から、どうしても話題が移植に偏りがちになります。第83号の巻頭言でも触れましたが、脳死下臓器提供の機会を増やすためのあっせん組織の改革、ならびに地方組織の重要性の見直しが進み、この地域では中部日本臓器提供支援協会（CODA）の設立が国の認可につながりました。連携施設を支援するための資金も、令和8年の診療報酬改定に盛り込まれたようですが、どの活動や施設にどの程度配分されるのかは明確になっていません。愛知腎臓財団は、都道府県臓器移植コーディネーターを配置するとともに、院内コーディネーターに対

する知事の委嘱状交付にも関与し、年4回の研修会も開催してきました。今後は、院内におけるコーディネーターの意欲を高める待遇改善に、今回の診療報酬改定が資することを期待しています。必要に応じて、県内の臓器提供施設および移植施設において、コーディネーターがどのような待遇で、どのように業務に従事しているかを調査することも考えられます。また、愛知県は都道府県臓器移植推進組織協議会（ROPO）の一員でもありますので、全国的なアンケート調査を提案することも可能です。

CODAについては、愛知腎臓財団も正会員であり、当財団の役員や臓器移植コーディネーターが、種々の委員会の委員等を務めます。

したがって、読者の皆様からのご意見・ご要望を、同協会へお伝えすることが可能です。

いま臓器移植数をさらに伸ばすには、何よりも、それに携わる人員の確保が重要です。皆様も報道等でご存じのとおり、日本の若手外科医は減少傾向にあり、臓器移植に携わる医師も同様です。地域の移植医が、所属施設の移植件数で競い合う時代は過去のものとなりつつあります。移植機会を増やすためには、施設を超えた協働が欠かせません。かつて東海3県で腎バンクを設置した私どもは、いま一度、オール愛知を超えてオール東海、さらには中部全体としての一体化を進めてい

かなければなりません。

この一体化は、医療者に限りません。かつて愛知県腎不全対策協会を立ち上げる際、当時の太田裕祥先生は、患者さんの協力も重要であるとして、ほぼ同時期に一般社団法人愛知県腎臓病協議会の設立にも尽力されました。これにより、愛知県の透析医療は様々な面で全国に先駆けて発展しました。移植に目を向けると、移植希望者の団体に加え、規模は大きくありませんがドナー家族の会もあります。こうした複数団体をつなぐ役割も、愛知腎臓財団の重要な役割ではないでしょうか。

移植の話が中心となりましたが、今回の診療報酬改定では、血液透析の評価について、移植希望者の紹介やCAPD患者さんへの支援等に取り組まなければ、従前の点数を確保しにくい仕組みになりました。これに関する施設間の意見交換や調整も、愛知腎臓財団の役割の一つです。関係の皆様には、ぜひご意見をお寄せください。



最近の腎炎治療の進歩

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院

腎臓内科部長 齋藤 尚二



増加の一端をたどってきたわが国の慢性透析患者数が2021年の347,671人をピークにいよいよ減少傾向となってきました。何よりも腎不全治療に携わる全ての人の努力の賜物ですが、医学的にはRAS系阻害薬の普及などによる保存期CKD治療の進歩によるところが大きいように思います。慢性透析患者の原疾患比率の推移をみても、糖尿病を原疾患とする患者数が相変わらず1位ではあります。明らかに勢いは鈍化しており、こちらもSGLT2阻害薬やGLP-1受容体作用薬の登場による糖尿病診療の進歩の影響が出てきているように思われます。我々の肌感覚でもいわゆる典型的な「糖尿病（二次性）ネフローゼ」の症例は昔ほどさほど見なくなってきたのではないのでしょうか。

原疾患第2位の慢性糸球体腎炎（CGN）の治療においてもここ数年で大きな動きが見られてきています。IgA腎症に代表されるCGNの治療においても保存的治療が中心であり、ステロイドを始めとする免疫抑制療法が一定の効果を示すものの、中には治療抵抗性で腎不全に進行していくのを悔しい思いをしながら診ている症例も一定数ありました。まさに医療従事者として無力感を感じる瞬間です。ただし、これらCGNの病態の解明も進み、より病態に特化した治療薬がどんどんと開発されつつあります。簡単ではありませんが、以下にCGNの中でも大きな割合を占めるIgA腎症と巣状糸球体硬化症の新薬について代表的なものを紹介させていただきます。

IgA腎症…糖鎖異常IgAなどによる病態の解明が進んでいます。それに関連して以下のような薬剤が開発中です。

- Sibepentimab：IgAの異常産生に関わる「APRIL」をブロックする抗体製剤

- **Povetacicept** : B細胞の活性化に関わる「BAFF」と「APRIL」の両方を阻害する
- **Sparsentan** : 「エンドセリン受容体」と「アングiotenシンII受容体」の2つを同時に抑える

- **Felzartamab** : 異常なIgAを作る形質細胞を標的とする抗CD38抗体

- **Selaxersen** : 補体経路 (B因子) を標的とした新規のアンチセンス核酸医薬

- **Mezagitamab** : 形質細胞をターゲットにし、蛋白尿の減少効果が期待されている

巣状糸球体硬化症 (FSGS) : FSGSの発症や進行には、糸球体のポドサイトの異常が関わっています。ポドサイトに直接アプローチする薬の開発が進んでいます。

- **TRPC6阻害薬** : 国際的な臨床試験の結果が『Lancet』誌に掲載され、プラセボ (偽薬) と比較して有意に尿蛋白が減少したことが報告されました。

- **Sparsentan** : 「エンドセリン受容体」と「アングiotenシンII受容体」の2つを同時に抑える

これらの新薬に加え、補体系に着目した治療の開発も目覚ましいものがあります。既にANCA関連血管炎などで適応のある **Ecizumab** (抗補体 (C5) モノクローナル抗体製剤) や **Ravulizumab**、**Avacopan** (選択的C5a受容体拮抗薬) や最近C3腎症に対して保険適応となった **Ipacopan** (補体B因子阻害剤) は今後他の腎炎にも適応が拡大される

可能性があります。

これらの治療薬の登場により、これからの数年〜10数年で腎炎治療は劇的に変わると思われます。薬価の問題もあり、どのような患者像に対して使用していくかなどの議論も今後進んでいくものと思われれますが、腎炎・腎不全治療は新たなステージに入っていくでしょう。

可能性があります。

これらの治療薬の登場により、これからの数年〜10数年で腎炎治療は劇的に変わると思われます。薬価の問題もあり、どのような患者像に対して使用していくかなどの議論も今後進んでいくものと思われれますが、腎炎・腎不全治療は新たなステージに入っていくでしょう。

よう。

当院におきましても積極的に治験の話を受けるようにしており、現在上記に紹介させて頂いた治療薬の中でもIgA腎症・巣状糸球体硬化症・アルポート症候群などの治験を行っております。ご興味のある方がいらっしゃれば是非ご紹介ください。

移植施設紹介

シリーズ | 第十七回 |

当院の特色



小牧市民病院 泌尿器科部長 木村 亨

当院のある小牧市は名古屋市の北に位置し、地下鉄上飯田駅から名鉄小牧線に乗り換えて20分ほど、車では名古屋市内から名古屋高速もしくは国道41号線でまっすぐ北上したところにあり、交通の便も良いことから医師の多くは名古屋市内から通勤しています。東名・名神・中央道が交わる小牧ジャンクション

ンや県営名古屋空港 (小牧空港) が近くにある物流がよいことや、市内のほとんどが平地であることなどから、工場や物流基地が集積した工業都市です。そのため、患者層も工場関係者が多く、近年ではブラジル系住民が増えているため、院内にはポルトガル語の通訳が二人いて診療の大きな助けとなっています。この事がコミュニケーションで広がっているのか、遠くからわざわざ当院を受診するブラジル系住民がいるほどです。

小牧市民病院も全国の例に漏れず、近年は

経営が厳しくなっており、昨年末には小牧市長が自治体病院を持つ全国179市町村の首長らで構成する「地域医療を守り抜くために行動する自治体病院首長会議」の発起人として、政府に対し緊急要望書を提出しました。

これが功を奏したのか2026年春の診療報酬改定では約30年ぶりとなる大幅アップとなったことは嬉しいニュースです。

当院では泌尿器科で腎移植を行っています。当科では以前から尿路結石や悪性腫瘍の治療に力を入れており、経尿道的腎尿管結石破碎術は県内でも有数の治療数を誇っております。残念ながら体外衝撃波結石破碎術は症例数が減少し、採算性が厳しくなったため、治療を終了することになりましたが、新しいレーザー結石破碎装置の導入を検討しております。導入されれば、前立腺肥大症や上部尿路上皮癌の治療にも使用したいと考えております。また当院は腹腔鏡手術やロボット手術にも力を入れており、悪性腫瘍手術の多くはこれらの手術で行われております。生体腎移植ドナーの手術も腹腔鏡下で行っており、今までは経腹膜到達法でしたが、最近の後腹膜到達法を導入し、合併症の軽減を期待しています。また当院には排尿ケアセンターがあり、排尿障害の分野で幅広く活動されている吉川医師が治療に熱心に取り組みされており、泌尿器科医も患者も非常に助かっております。

当院の移植は1986年から行っており、今までに献腎110例、生体腎59例の移植を

行いました。また臓器提供も40回ほど行っております。現在の移植を取り巻く環境としては、泌尿器科を長年率いてきた上平医師が2025年3月に退官となり、その後を引き継ぐために、その1年前に私がJCHO中京病院から転動しました。現在、移植に携わる常勤の泌尿器科医は6名（男女とも3名ずつ）ですが、非常勤となられた上平医師も外来診療を行っております。新型コロナウイルス感染症流行当初は、まだ疾患について不明な点が多く、有効な治療法も無かったことから、移植患者における死亡率が高く、安全面を考慮して当院の移植は中止しましたが、コロナ禍の終息を待って2023年から再開し、2026年4月までに生体・献腎合わせて6例の腎移植が行われました。腎移植にあたっては、名古屋大学医学部附属病院泌尿器科を中心とした関連病院の経験豊富な医師と相談しながら診療にあたることにより、腎移植医療の質の維持・向上を図っております。

医師の働き方改革による残業時間の規制は多くの移植施設で大きな問題となっておりますが、今年の春にあった腎移植関連の勉強会で、JCHO中京病院の小松先生から、心停止後提供であっても従来に比べて時間的拘束をかなり短くすることができたとの報告があり、大変勇気づけられました。昨今話題の機械灌流による臓器保存が普及すれば、働き方も更に工夫できるのでは無いかと期待しております。



透析施設紹介

偕行会セントラルクリニック

医療法人偕行会 偕行会セントラルクリニック

院長 渡邊 出



偕行会セントラルクリニックは、名古屋共立病院の透析部門が、分離独立する形で1999年8月に発足、2019年9月に現在地に新築移転をし、現在に至っております。

現在約350名弱の維持透析患者様、20名強の腹膜透析患者様の診療を、隣接する名古屋共立病院および名古屋掖済会病院、中部労災病院、日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院、大同病院、藤田医科大学ばんだね病院、名古屋大学医学部附属病院等の近隣基幹病院にも支えられながら行っております。当施設の特徴としては、Vascular Access (VA) センターも併置しており、偕行会グループの中核施設として、年間約1000

例のPTAおよびVA手術を施行いたしております。現在3名の常勤医師（内1名はVA治療専属）、名古屋大学、藤田医科大学等からの応援医師、看護師41名、CE16名、看護助手15名、放射線技師7名、管理栄養士2名、相談員2名、事務職員5名の計約100名の職員にて診療を行っております。高齢化の進む現在の透析医療の状況に鑑み、ASOに対する炭酸泉療法、虚血性心疾患の早期検出を目的としたアンモニアPET検査の導入、フレイル予防のための栄養指導及び運動療法等の合併症管理にも積極的に取り組んでいると自負いたしております。

当クリニックは約3500名の透析患者を抱える偕行会グループの旗艦施設としての立ち位置もあり、学術活動等にも積極的に取り組み、本年度の日本透析医学会にも6演題登録させていただいております。よく働き、よく学び、そしてよく遊ぶことが肝要であると

というのが当法人の基本方針であり、当クリニックもメリハリをつけた働き方で夏季休暇等の年休を積極的に取得していただくように働きかけていますが、これはどこでも同じだと思いますのですが、慢性的な人員不足の影響もあり思うに任せない状況も続いております。

これも各施設共通だとは思いますが、当クリニックも透析患者の減少および高齢化の波にのまれております。前任地で地域医療構想に関する会議によく出席させていただきまして、2025年度までの予想では、まだ医療需要はわずかながらですが伸びるという前提



であったのですが、皆さんご存知の通り、コロナの影響もあり医療需要はすでにマイナスに転じ、今回出た2040年度の予想では、全体の医療需要自体も減る中で、85歳以上が大きく増加、それ以外のいずれの年齢も大きく減少するといわれています。いよいよ容赦のない人口減、高齢化の波にさらされていくのだと思うと背筋が凍る思いがします。今、急性期病院を襲っている経営難の波が、早晩我々、透析の世界にやってくるのは間違いないだろうと思います。

洪沢栄一の言葉に【世の中には金儲けは卑



しいことのようにいう人もあるが、それは大いなるあやまりである」とか【論語と算盤は一致すべきものなり】というのがあります。至極名言で、わたくしは座右の銘としていますが、まさにその通りで、いい医療をしたければ収支が償わなければならないということだと理解しています。縮小する医療マーケットの中で、前任地の公立病院でも、今やこれ以上の公的扶助は期待できない、自立が求められるという意識が芽生えている（遅すぎるのですが）状況の中で、民間施設として、医療の質を保ちながら、経営も維持



するという意識を持ちながらやっていくのはチャレンジングですが、避けて通れない道かもしれません。同じく洪沢栄一の言葉の【成功や失敗は最後まで分らない】【計画は立てるだけでは意味がない、実行してこそ価値がある】というのを更なる座右の銘としてやっつけていければと思います。堅い話となりましたが、厳しいからこそ、楽しいという一面もあるように思います。今後とも、愛知腎臓財団の皆様の叱咤激励（できれば激励のほうで）をよろしくお願いいたします。



透析施設紹介

岡崎北クリニック

医療法人人生寿会 岡崎北クリニック

院長 佐々木 昌一



当院は透析専門の医療機関として1992年に先代の佐々木院長が開設し、2012年からは医療法人人生寿会の一員となり、2017年より私が院長を引き継いで現在に至っています。

当院は愛知環状鉄道大門駅から徒歩7分、岡崎市の北部、大樹寺の比較的閑静な地域にあります。透析ベッドは49床で、昼間透析は9時から15時、夜間透析は月・水・金曜日の17時から23時に行っています。透析患者数は最近では100名弱で推移しています。本原稿を書いている時点で通院している94名について、詳細をご紹介します。

患者の年齢は40歳から93歳で、平均67.8歳、透析歴は3か月から最長493か月で、平均132か月です。昼間患者と夜間患者で分けてみると、昼間患者の平均年齢・透析歴はそれぞれ71.3歳、130か月、夜間患者ではそれぞれ56.7歳、135か月と、透析歴には差はなく、夜間患者の年齢が若いという結果になっています。

また、7名の患者が献腎移植を希望しており、日本臓器移植ネットワークに登録しています。過去10年間に2名が献腎移植を受けています（うち1名は臍腎同時移植）。

血液浄化方法としては、血液透析（HD）のほかに、オンライン血液濾過透析（OHDF）、間歇補充型血液透析濾過（IHDF）を行い、透析患者さんに現れる様々な症状の予防や緩和、予後向上に努めています。これらの治療法の割合は、HD 18%、OHDF 56%、IHDF 26%です。

透析スタッフは、慢性腎臓病療養指導看護師（CKDLN）を含む看護師11名、臨床工学技士6名、看護助手2名で対応しています。また7名のドライバーが交代で患者の送迎に当たっています。送迎利用者は患者の48%で、患者の高齢化に伴って年々増加傾向にあります。

当院は開設以来、フットケアに力を入れてきました。前任の院長、看護師長の「患者さんの足を守ろう」という思いを引き継ぎ、スタッフ一丸となって実践しています。足の観察や足浴、爪切り、マッサージなどのケア





感染対策個室

を、透析毎、週1回、月2回と全患者さんの足の状態に合わせて予定を組み、足病変の予防や早期発見に取り組んでいます。また、ABIやSPPを施行し、問題があればすぐ専門施設に紹介し、検査・治療を行っていただきます。依頼先は主に岡崎市民病院で、迅速かつ適切に対応いただいています。

シャント管理は、超音波断層撮影装置（エコー）を用いてシャント血流量や狭窄の有無を観察し、シャントトラブルの早期発見に努めるとともに、生寿会かわな病院などで定期的にPTA（経皮的シャント拡張術）を行っ

ています。また穿刺困難な患者に対しては、エコー下で穿刺して患者の苦痛を和らげる努力をしています。

透析室ではワンフロアで大勢の患者が治療を受けるため、感染対策が重要になります。当院では発熱等感染症が疑われる場合に備え、24時間換気・空気清浄・温度管理が行われている個室とビニールシートで仕切りをしたスペースを設けています。専用の出入り口もあり、院外から他の患者と接触することなく別動線で直接入室が可能です。この個室・スペースは、コロナ禍には大変重宝しました。

当院の近くにある大樹寺は、松平家（徳川家）の菩提寺です。松平元康（後の徳川家康）が桶狭間の戦いで今川義元討死の後、大樹寺へ逃げ隠れ松平家の墓前で自害しようとしたところ、13代住職の登誉が「厭離穢土欣求浄土（おんりえどごんぐじょうど）」と説き、切腹を思いとどまらせたと言われています。この言葉は「苦悩の多い穢れたこの世を厭（いと）い離れたいと願い、心から欣（よろこ）んで平和な極楽浄土を冀（こいねが）うこと」という意味です。その後家康公はこれを旗印に掲げて戦いました。

岡崎市内にはあちこちにこの言葉が書かれています。透析患者さんの苦しみを少しでも緩和することを目標に掲げ、岡崎北クリニックはこれからも良質な医療を提供していく所存です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



◆ トピックス ◆

世界腎臓デー2026 全国キャンペーン

世界腎臓デー2026 全国キャンペーン「腎臓をいかに守るか ～あなたの腎臓大丈夫?～」と題し以下の内容で講演会を3月8日（日）ウインクあいち 大ホールで開催しました。250名以上の大勢の方々にお越しいただき、活気のある会となりました。



湯澤先生のご挨拶



客席の様子

臓器提供協力病院への感謝状贈呈式および意見交換会

5月19日（火）ホテルメルパルク名古屋におきまして、令和7年度に臓器提供いただきました協力病院への感謝状贈呈式と式後には財団および病院関係者の方々にご出席いただき意見交換会を開催いたしました。総勢50名ほど、ブッフェ形式でのお食事にお酒も入り、各々会話も弾み賑やかな会となりました。お忙しい中、ご出席いただきました皆様に御礼申し上げます。



【 お知らせ 】

愛知腎臓財団の会長を平成18年から平成30年まで務められた前田憲志氏が令和8年3月21日にご逝去されました。

謹んでお悔やみ申し上げます。



編集後記

今回の86号の巻頭言では、1997年の臓器移植法施行により発足した日本臓器移植ネットワークが全国で唯一、死者から提供された臓器のあつせん組織として活動してきたが、マッチング業務を除くドナー関連業務を地方に新たに設立する組織でも行えるようにして、臓器提供数の増加を図る国の方針に従って、この地方では先頭を切って一般社団法人中部日本臓器提供支援協会(CODA)が設立されたこと、その社員となった当法人もこれに協力し、組織を超えた地域の協力体制の構築が重要であることなどを紹介した。

次に、日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院の腎臓内科部長齋藤尚二先生からは、RAS阻害剤による保存CKD治療、血液透析導入に至る原因となる糖尿病の治療方法の進歩、そして糸球体腎炎の治療薬の開発の現状について寄稿いただいた。慢性腎不全には効果的治療薬のない時代が長く続いたが、これからは腎臓病患者に明るい時代がやってくることは喜ばしい。進歩の著しいこの領域については、愛知腎臓財団は、これからも新しい情報の提供に注力して行きたい。

移植施設である小牧市民病院の木村亨部長からは急性期病院を取り巻く厳しい環境にありながら、泌尿器科領域では、尿路結石、ロボット支援下の悪性腫瘍手術などを行うための十分なスタッフをそろえられるなどのお話があった。尾張地区では唯一の腎移植を行う施設としてもさらに活動を進めてくださることを期待する。

透析施設紹介では、医療法人偕行会 偕行会セントラルクリニック院長 渡邊出先生と、医療法人 生寿会 岡崎北クリニック院長 佐々木昌一先生から、診療地域、患者数は異なるものの、患者さんの高齢化の進む中、それに伴う対応方針を明確にして、それぞれの施設が独自の診療提供を行っていることが心強く感じられた。

最後にトピックスとして、世界腎臓デー2026全国キャンペーンの一環として、ウイנקあいちで開催された講演会「腎臓をいかに守るか？あなたの腎臓大丈夫？」の風景をお伝えしました。

(T.K.)